



〔中川一政の水墨画〕
・『中外商業新報』 昭和六年五月十七日

〔大男の中の小男〕
中川一政の水墨画を見て

外狩素心庵

彼はその案内状に、先づこれが一ト通りの事を申述べた後へ「大男の中に小男あり、何をいへるかとききに行けば、……われは此処にあり……」と記し、そして「右抱負に御座候」とやつてゐるのだつた。

そのいはゆる小男への見参——同じ一政でもいつもの一政ではなさそうに、それが心持ち引立つて見える。開催日は十六、七のたつた二日間、場所も麴町下二番町七〇の倉橋藤治郎氏の家、並べたものは水墨画の二十点ばかりと、七、八点の装幀の図案と、四、五点の陶器画だつた。

彼は必ずさうあるべきであらうやうに、頬を真つ赤にさせ、そして澄み切つた眼を一層くるりとむいてゐた。「我は此処にあり」——なるほど一政の持つさうした強められた童心はとても輝かしい。

彼は近年水墨画に随分骨を折つてゐる。去年と今年と、その春陽会におけるその画蹟でもほぼ察しはつかうが、とも角身を入れてやつてゐる。ここへならべた歳晚帖、煙霞帖などなか／＼そのまとまりがいい。森田恒友の水墨画のそれほどに、この一政の画質は風ぎ切つてゐるものではないが、しかし、何かとまめによく、その急所／＼がねらはれてゐるのだつた。それも画中の山水、雲烟、人馬、いかにもその無垢の童形を見せたといはぬばかりに——。

一枚一枚のものも悪くないが、画帖の方は又それ以上の飽かないながらも。即ちここに彼の水墨画の性質としての目下の面白さがある様だ。といふのは一面から見つゝではまだその格が張りかねるのである。

何れにしても時代の生んだほんとうに新しい文人画とは――、即ちそれがこの質のものであるのではなからうか。洋画人でもつてこれと幾分似通つた水墨画をやるものに柚木久太があり、正宗得三郎などがあるが、どれもまだ純粹でない。徹底しやうともしてゐない。そこへ行くと一政はさすがに腹が据わつてゐる。同じやるにも独往独歩、そこから自分といふ人間をほんとうにみがき出さうとする。

そこで一政の水墨画が即今だけに完全したかといふのに、それは今迄の文人画には見られない内容そのものを持つて、何れも新感覚の好風景ではあるが、難はその線と面との水墨でのなじみに、今一トいきの工夫があり度いといふ事と、もつとその対象に凝念ぎやうねんしてかかつてほしいといふ事だつた。

日本の真に新しい文人画もこの辺の処で成立つてもらはないと困ると思ふ。そこで古い文人画への呼吸者達にこの展観を見せてやり度いと思ふのだつた。

陶画はほんとうにまづい。すこしも器に乗つてゐなかつた。装幀画は森田草平の「吉良家の人々」でも、牧逸馬の「この太陽」でも、若山喜志子の「筑摩野」でも、その及ばない気持が却つて能くはまつてゐた。しかし陶器といひ装幀といひ、何れかといへば、氏にはあつてもなくてもよいもの

だ。否却つていらぬものかも知れなかつた。

『中外商業新報』 昭和六年五月十七日

外狩素心庵（とがりそしんあん、本名・外狩顕章。一八九三―一九四四） 美術評論家。中外商業新報社学芸部長、参事を歴任。愛知県安国寺第十五代住職。曹洞宗大学を出て、中外商業新聞社に入社勤務、美術記者として独自の美術評を執筆した。多趣味で、書、絵画を嗜み、詩、句作も行った。

◇

*春陽会第八回展（昭和五年）（第十二室）

中川一政 《煙霞帖》 一（煙霞如是好）、二（山中春望）、三（時春雨寒）、四（偶海村月）、五（我愛日本國）、六（海村春望）、七（春自遠方来）、八（能解閑行有幾人）、九（山間日永）、十（漁樵同時）

*春陽会第九回展（昭和六年）（第十一室）

中川一政 《煙霞帖 追補》（前山薇也肥）、（二月入斧之時）、（波浮港）